和歌山県立近代美術館

年　報

昭　和　49　年　度

和歌山県立近代美術館
年　　報

昭和49年度

目　　次

研究紀要「木下孝則芸術への試論 ― 調査資料より ―」……1
1　主　要　行　事……8
2　主催展覧会　吉田政次遺作展……9
　昭和49年度前期常設企画展……13
　裕伊之助展……14
　昭和49年度後期常設企画展……17
　館蔵品による和歌山の作家展……18
3　共催展覧会……20
4　貸館展覧会……21
5　普及活動……23
6　昭和49年度所蔵作品・寄託作品……25
7　所蔵品貸出状況……29
8　美術館協議会委員名簿……29
9　職員構成……29
10　館内配置図……30

研　究　紀　要

木下孝則芸術への試論 ―― 調査資料より ――

学芸員　太　田　将　勝

木下孝則の芸術を考える上で、まず指摘せねばならぬことは、母方の叔父児島喜久雄の彼に及ぼした感化である。

「児島喜久雄は美術評論を書くばかりでなく、若い頃から絵が好きで、器用だったから、自分でも水彩画油絵、エッチング、それに日本画風の絵まで描いていた。また中学時代からドイツ語が達者だったので、書店を通じ美術書類を取り寄せ、その方の勉強もしていた。」（註１）

晩年の孝則が回想しているように、児島は実技の習練も積み、のちには公募展に入選するほど画技にも巧みであったが、学業に秀れ、自ら洋書をとりよせ、西洋美術についての知識を、広く読書を通し得ていたという。　学習院に学び「白樺」派に属し、個性や意志の尊重、善美を愛する理想追求という彼らに一連した精神の基盤を、児島も共有していたようである。白樺派の人たちの多くは、芸術を生活という一つのトータルなものにおいて考え、把え、芸術の理論的討究と同時に、実技面にもそれぞれ個性的な試みを示している。児島も、彼らと等しく、あるいみで器用であり、多才であったといえよう。

こういう児島が、七才年下の甥孝則に与えた影響というものは、極めて大きなものがあったようである。孝則の追憶は、中学時代に遡る。

「当時、小学校を出たばかりのぼくに、名画の複製を見せたり、ドイツ語のさし絵を示し、相手に通じるかどうかはお構いなく、懇切丁寧に、画家の伝記から逸話にいたるまで話してくれた。叔父の話はくどいので、時々イライラすることもあったが、今から思えば相当な説得力を持っていた。」（註２）

かくして、中学初級の頃「すでにギリシャから現代までの西洋美術史の概略を知ることができた」ということである。（註３）

児島の教養は初めドイツ語系の原書を通して得ていたので、ベックリン、クリンガー、シュトック、リーベルマン等の名が、しばしば話題にのぼったという。（註４）のちに孝則が16才の時、野球に熱中しすぎて肋膜を病み、二年間休学した折、当時世紀末芸術（ユーゲント・シュテイル）に関心を寄せていた児島が、見舞に来る度持って来た雑誌や本というのも「ユーゲント」や「マイステル・デア・ファルベ」であったという。（註５）

が、孝則はむしろ「フランスの印象派の人々の絵の方に魅力を感じた」と語る。ドイツで出された前記の雑誌類の中にドガの絵を見つけ、それから受けた感動を、のちに次のように綴っている。

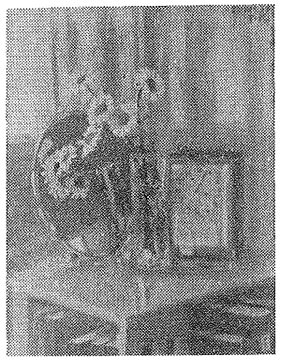
「花束を持った踊り子、舞踊の稽古場、競馬場、また室内で髯のある紳士がドアの所に立っていて、片隅に女性がすわっている図など、いずれも絵に動きが感じられ、肖像画でもまことに生き生きとして印象強かった。ことに数枚の入浴する裸婦の絵、それは切り抜いて額にも入れたが、非常に自分を惹きつけた。従来の絵のように物体を正面から、また俯瞰して見たものばかりでなく、その視点は多様であり、ポーズも自由で、ドイツ系の絵に比べて実に新鮮な感じがした。」（註６）

これは、明治43年（1910）有島生馬が帰国し、同年創刊の「白樺」に『回想のセザンヌ』他名高い翻訳や印象派あるいは後期印象派の作家についての紹介記事を載せた時期に当る。孝則の印象派に対する関心の高まりは、明らかに有島らの印象派紹介が直接刺激となったことを、実弟の一人は証言する。（註７）雑誌「白樺」の同人には、武者小路、志賀、里見、有島武郎、生馬、長与善郎、柳宗悦らとともに、児島喜久雄も加わっており、彼らの美術史上重要なこの先駆的活動を中学生の孝則は比較的身近な事件として受けとめていたようである。

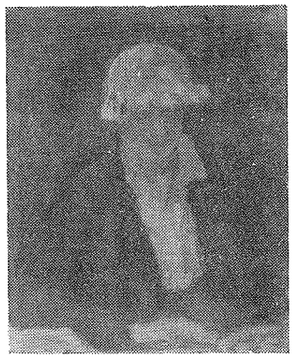
＊

孝則がはじめて絵を描いたのは、前述の肋膜の病が快方に向い、ある日油絵制作を思い立ち、早速母に油絵の道具一式を買ってもらい、絵筆をとったときである。

「さていよいよ白いカンヴァスに向かい何を描こうかと思案したが、ドガの裸婦が頭から離れない。そこ



時計のある静物（1914）



樹蔭読書（1921～3）

読　　書　（1931～2）

で１年以上ぼくに付添ってくれている看護婦に相談して見た。彼女も毎々叔父から美術の話を聞かされている仲間だったので『私がモデルになりましょう』といって裸になってくれた。ぼくにとってはすべてが驚きであった。かくてドガに刺戟されたぼくの最初の油絵〈裸婦〉が出来たのである。」（註８）

この画は現在失われ、ほゞ同時期のものとして「時計のある静物（仮題）」が残っている。構図も充分ではなく技術もまだ稚いが、銀盆に映った水差や室内の場景、ニスで光った本棚の上の置物を映した影の色の扱いに、後年の孝則につながる「機微を捕える眼」（註９）を感じさせる。この絵を描いている孝則の傍らで児島は質感や光について、あれこれ批評し、指導したという。

児島は、実技の手ほどきを三宅克巳（註10）から受けていたが、孝則は児島の知識を尊敬していた一方、手堅い写実的なその画風に対し、のちに多少軽視する気持を持つに至ったようである。（註11）美術に関する基礎教養を得るに当って、児島の存在は大きかったが、孝則が画家として自律し始めると、その芸術の方向は児島の思惑とかなり違う展開をしたようである。

＊

孝則の父友三郎は、旧紀州藩より抜擢を受け、東大法科から司法官となった人であるが、長男孝則にも正規の高等教育を受けさせようとし、学習院高等科から京大政治経済学科に進ませた。が、孝則は学業になじまず、間もなく東京に戻り、翌年東大哲学科に再入学する。殆ど登校もせぬまゝ、ここも退学し、やがて本格的に、絵を描きはじめることとなる。

後に画家として立った孝則は、一般に「変り種」と見做されていた。（註12）極めて自然に高等教育を享受できる環境にあったにも拘らず、彼は、自律的に学問を学ぼうとする意欲に乏しかった。大学そのものが孝則にとってはあまり意味のない、魅力のない存在であったようである。二つの大学を退学し、その後画業に身を打込んだ彼の性向を考えるとき、むしろある意味では天成の画人ではなかったかとさえ思われる。

彼は、画業50年間を通して、美術に関するか否かを問わず、著書は殆ど無く、軽い随想風の短文を数篇遺すのみである。また特定の作家を掘り下げたり、精密に構図の研究をするということはしなかった。彼の芸術について、のちに評論家は「構築的でない」「即興的である」（註13）としているが、彼は、青年時代において、既に、現論構成によるよりも、天性の直観力による道を選び取っていたとはいえないだろうか。

二科に初入選の頃のことを彼は次のように語っている。

「学校を中退した頃、弟の同窓だった富永惣一君が家へ遊びに来たのをつかまえて、モデルになってもらって描いた絵が、二科に出品するようなことになって入選したのが事のおこりで、その年巴里へやってもらった」（註14）

彼が画家として立つことについては、当然ながら父の大反対があったといわれる。ところが、この二科初入選の報を聞いて、父はやっと折れ、褒美にフランス留学を許したそうである。（註15）

彼の職業画家たることを最初喜ばなかった父も、元々趣味として書画を好み、手造りの鉢を焼かせるなど芸術そのものに充分理解はあったようである。母方の家系にも芸術家の流れがあり、孝則たち兄弟の生い立った家庭には、芸術に親しむ気風もあり、彼の稀な天分を伸ばすには、極めて好都合であったといえる。

この家庭環境と相俟って、彼の画才を開花させるに与ったものの一つは、貴族的な自由な校風を以て知られ、当時「白樺」派の土壌ともなった学習院である。（註16）孝則は、６才から23才まで17年間在学し、学業成績などを余り気にすることなく、自由に個性を伸ばすことができたようである。

＊

大正10年（1921）９月、孝則は、　二科会展の開催

期間中にフランスに旅発った。当時の多数の渡仏画家のうち、同年の主なる渡航者には、林倭衛、里見勝蔵や硲伊之助、小出楢重、黒田重太郎、小島善太郎がおり翌11年には、前田寛治、中山巍、高畠達四郎、12年には、中野和高、佐伯祐三らがいた。

大学退学の前後から、これら青年画家の幾人かとは直接交際があったようだが、パリでは互いに気安く、ますます親しく交流するようになったという。このことが、孝則に良い意味での刺戟を与えたことは想像されるが、林倭衛などからの悪影響もあり、生活は徐々に放埒に傾いていったようである。（註17）父友三郎にかねて監督を依頼されていた日疋という日仏銀行パリ支配人に出逢ったのは、丁度この頃であった。パリ郊外、セーブルの日疋氏邸で、絵の具やモデルを用意され、以後その監視下に置かれ、徹底的に絵の制作においこまれることとなる。ここで描かれた作品の多くが、のちに滞欧作として、二科会等に出されたようである。

約2年間のフランスでの生活を終え、大正12年帰国している。

翌大正13年9月の第11回二科会に「針仕事する女」等滞欧作7点余りを出品、樗牛賞を受賞し、滞仏中の成果を示した。万鉄五郎は、

「大体の傾向は印象派風から入っていったものだと思うが色の取扱いに特色がある。」（註18）

としたが、この期の作品では、我々は日疋氏邸で描いた「樹蔭読書」のみを実見することができた。（註19）光を意識し、光の中で、光を反射しながら存在する対象を、色彩に解釈し直し捉えようとする態度が、既に見られ、これはのちに孝則特有の極めてすぐれた色感を生むこととなる。大正14年9月の第12回二科会には「後向きの裸婦習作」他2点を出品し、二科賞を受賞している。堀義二は

「相当達筆ながらまだ筆が重くて難渋」（註20）

と評したが、中川紀元は

「鷹揚な気持の良い作品。（中略）強いてこの作家に希望を申せばもうすこしの現代人の焦燥が欲しい」（註21）

とする。現存する「後向きの裸婦習作」を見ると、やや暗色調の画面の中に、中央には白くつややかな背中を向けた裸婦、背景には雑然とした白布、また近景左には、椅子の部分などが、光を鋭く効果的にとらえながら、伸びやかにむしろ大胆に描かれる。奥行のある自由な空間感覚に溢れたコンポジションであるが、画面全体を支配するものは、時流に左右されない静かな落着いた空気である。これは、作者の世界そのものと云えよう。

二科会での連続受賞ののち、大正15年（1926）3月の第1回聖徳太子奉讃展には、「K男爵夫人像」を出品した。川路柳虹は「二科新人の気を吐く作品」（註22）と褒めているが、この画題によっても、現象を華麗に、そして機敏に捉える彼の体質の一面を、見てとることができるであろう。

*

大正15年（1926）5月、孝則をはじめとする、前田里見、小島の四人は、同年3月帰国したばかりの佐伯を加え、1930年協会を結成、第1回展を開いた。これに先がけ、孝則は、協会の設立宣言文を起草し、発表している。

「1930年、この年号は吾々の頭に異様に響く。この年号を無意識に過去にやりたくない。この年号を意義ならしめてやる。（以下略）」（註23）

今、この冒頭に始まる全文を読んで、1930年という年に、特別な意味をもたせようとする、若者たちの熱気を感じることができる。1930年協会は、1エコールに集合した画家たちの必然的な結びつきによるのではなく、当時の青年画家たちが、若者だけの自由な発表の場を求め、同時に既成画壇に対し、彼らの問題意識をつきつけたのであった。のちに、昭和の洋画史の上で、多様な展開を見せるそれぞれの流れが、未分化のまゝ、この団体に内包されていたのである。

この第1回展における孝則の出品作品について、里見は次のように記している。

「木下の16点はすべて香気強い作品だ。読書する女が私は好きだ。裸婦は美しい銀灰色調を以て裸体画としては最上のものだ。（中略）こゝには太陽の直射日光は少しも発見されないが、今後なお物質固有色を以て写実に向うことを希望する。」（註24）

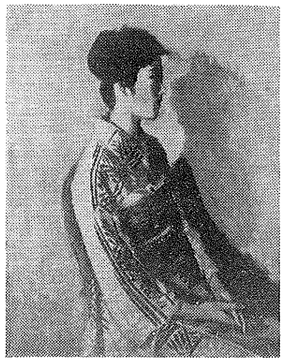
すでに印象派を脱化した孝則の作風のその後の展開を、こゝでは早くも予見している。貴品ある一種爽快な作風。ゆるやかな室内の光線を受けた裸婦の肉体がそれを反射しながら照し出されて「銀灰色」に描かれる様は、後年の「裸婦ナックレ」につながるものである。感能を濾過し、肉体そのもののもつ量感や肌色を昇華し、対象を人工的なまでに理想化し、まとめあげようとする。これが、ますます洗練度を加え、晩年の作風に至るのである。

孝則は、第2回展に「少女像」、第3回展に「画室にて」を出品。これらの作品は現存しないが、図版で見る限り、軽快なタッチの優雅な作品である。展覧会評には

「ノーブルでわかり易いが、如何にもあまい、中でも『画室にて』は一般の賞讃を博するであろう」（註25）

とある。

二科賞の受賞直後、林の勧めによって、孝則は春陽会に入会したが、昭和2年4月の第5回春陽会展につ



女優の像（1926）

K男爵夫人像（1926）

後向きの裸婦習作（1925）

いて、前田寛治は、次のように出品作一般の低迷を語り、同時に孝則をも含めた新人達の作品を賞讃する。

「春陽会は外光派が重きをなしているが、（中略）質感が無視され、寒暖の対照がなく、調和に欠けた立体感の伴わない作品が多かった。（中略）春陽会へ作品を運ぶ人々はこの新人の外光派の一団の作品を見るといい。いくら色彩に没頭している人々だと云っても地面はチャンと地面だ。樹はチャンと樹だ。空は限りのない空だ。土はズシンとした土だ。」（注26）

前田は、孝則の「女流画家」を佳とし、「木下氏には機微を捕える眼が開けている」と評した。無雑作な日常的情景の中から一つの決定的なアングルを見つけそこに視点を据えて、画面効果を高めてゆく、希有ともいえる極めて鋭敏な孝則の感性を鋭く衝いている。

*

昭和3年（1928）5月に、再びフランスに渡り、パリに住んだ。翌年、春陽会を退会している。滞仏中はアカデミーやサロンを重視せず、主にアンデパンダンに出品し続けた

1930年協会は、前田、佐伯の急死、里見の脱会、木下の渡仏により、在京の創立会員は、小島一人となりやがて解散し、昭和5年独立美術協会となった。孝則は、再三勧誘を受けたに関らず、実弟義謙と共に独立には参加せず、帰国後11年7月、第23回二科会に、滞欧作19点を特陳した。中川一政は、

「木下の沓として消息を断った外遊中に、仕事は一向変化して見えない。これは木下の不名誉とは思わない。木下の外国生活は可成り苦労が多かったようである。それにも拘らず木下の伸々した筆触純粋な色彩が失われていないのは喜ばなければならぬ。」（註27）

中村節也も、ほゞ同様の見解を示す。

しかしながら、渡航の前と後で、画風は全く変っていなかっただろうか。「後向の裸婦習作」と「読書」「赤衣の女」を比較すると、明らかに変化が見られるようである。かつて前田が、「機微を捕える眼」を指摘し、のちの評論家は一種の「即興性」を指摘したが第2次滞欧中の作品では一限られた作品数点によって判断するのは危険であるが一この即興性が程よく圧えられ、かなり構築的な構図、計画的な配慮がうかがわれる。

いま「読書」を見てみると、背面の壁と右手書棚によって空間が示され、木製の円形テーブルその他の配置物が、一見雑然と見えながらも、互いに相関しつつ遠近効果を高めている。画面中央に座して読書する婦人の頭、顔、胸、下肢はそれぞれの面によってしっかり組み立てられ、これらと相俟って、本を支えたやや大きめな手一右手は下にかくれているが一やそれにつながる両腕は、視覚上婦人の頭部と関連し合い、両面をしっかり組み立ててみせる。以上のことは、「赤衣の女」についても、そのまま当てはまることである。

更に言えることは、これらの作品において、背景の配置物が第2回の渡仏以前のように概念的に処理されないで、写実的に克明にえがかれていることである。「読書」の円形テーブル上の書籍の捲れあがった表紙書棚に置かれ雑然と積み上げられた本、「赤衣の女」画中のキャンバスの裏などは、いずれも質感を見事に表現し得ている。

第1回滞欧中の作品と比較して、第2回のそれをアカデミックとする評論家もいるが、ヨーロッパの絵画を典範とし、その習練の上に自己の作風を確立したであろう気力の最も横溢した時期といえよう。これ以後の作は、以前の作に比べて、より洗練された、西欧的な雰囲気が漂っている。作家の志向する世界が、やや変化を生じたのであろう。

前述の滞欧作19点については、展覧会評では次のように記されている。

「即興的な作品が多数。（中略）何れも欧州の伝統的な油絵を学んで、習練された決定的な筆技を見せていた。常識的な感覚であるが、健全で明快であり、二科会に稀な正統派的要素を示すものである。」（註28）

この時期に、特にマネやマティスの作風に影響されたと云われているが、単純な模倣という形では、技法を摂取してはいない。やゝ「構築的」になった画面から、マネやマティスの作品から受けた示唆が、確かに読みとれるようではある。

*

昭和11年（1926）、小山敬三、硲伊之助、実第義謙らと共に二科会員を辞退し、12月一水会の創設に参加し、創立会員となった。森口多里は、

「マネ的なみずみずしい色感の木下孝則らが一水会を組織して安価な新奇を排して健全にして高雅なる作品の発育を主張するようになったのは、まさに所を得たものであった。」（註29）

と評する。印象派よりももっと具象的な方向を目指していたであろう孝則にとって、一水会は、もっとも相応しい活動の場であったのではなかろうか。

一水会では、第1回から34回まで必らず毎回出品し「健全な写実的作風、平明暢達」（第1回展評）「暢達正統派的の技術」（第2回展評）「美しい筆触、程よい弾力を以て表現の厚味をつけている」（第5回展評）等ほゞ一定した評価があり、戦後は、柳亮が第19回展評に「いい意味での技巧主義の一つの典型」（註30）と評している。

一水会は、官展に地つづきだといわれるが、事実孝則は、戦前の文展から戦後の日展に至るまで出品をし続けた。（註31）が、彼にとっては、作品発表の場に官展も反官展もなかったのであろう。

第4回文展評で、児島喜久雄は、

「木下孝則の『N嬢像』は現代味ある風俗画。背景は例のごとく浮いてゐるが、同君最近の佳作に違いない。私は以前はもっと画格の高いものを同君に期待してゐたのだけれども一と頃のソルンめいた絵から遂にこんなことになって了ったのは残念である。」（註32）

という。こゝで「風俗画」と云い切ってしまうのはやや、辛辣に過ぎるかと思うが、本質に迫らず、現象を的確に捉える孝則の芸術の一面を、それなりにずばり云い当ててはいよう。しかしながら皮相的な作画に終ることなく、その主要な作品はいずれも造形的に周到な配慮がなされ、視覚的にも機微をとらえ得た、見応えある画面を現出する。

*

孝則の作風は、華麗で貴品あり、清楚である。そしてその底流に流れるものは、西欧的なものへのある種の憧憬であろう。画家のアトリエや生活様式、あるいは画中のモチーフをつぶさに見、いかなる素材が選ばれ、いかなる設定を好むかを知れば、彼の住む世界が自ずと理解される。彼は、日本の風土的なもの、伝統性に対して、比較的無関心であったといえるのではなかろうか。かといって、奇抜な、最先端の西洋風、現代風を好むのではない。たとえば煙んだ洋式の家具やヨーロッパ中世の古城の城扉の金具、古びたシャンデリア、ペティカ、赤煉瓦で縁を囲んだ蓮の池といった一連のもとに、愛着を示す。

そういう空間の中で、生み出された作品は、洗練された美しい肢体の裸婦であり、スペインの踊り子風であり、バレリーナであった。画中に見られる女性たちは、理想化され、多くは前述したような西欧的雰囲気をただよわす空間の中に置かれている。

彼女たちの姿態は、血肉を有する人体であるよりも人工的な美しさに磨きあげられた人形とさえ見える。彼は、モデルを実写するというよりも、自分の世界や好みを、写実の形をかりて表出していたと云えるであろう。モデルとして座ったある婦人が、画中に描かれた自分の姿が美しすぎるのを見咎め、ふとそのことを作者にもらした時、彼は、軽く往なして

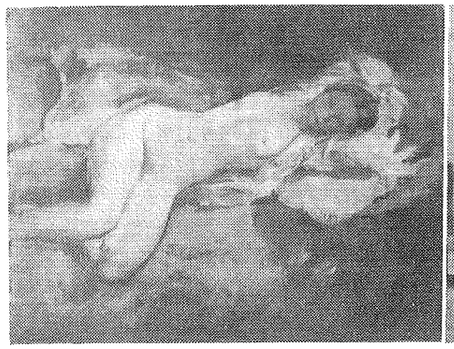
「絵は本人に似ていなくてもいいんだよ」そう、一言いったという。彼には、画風というよりも、人物を描くスタイルが、常にある程度一定していたようである。しかしながら、それぞれの作品のそれぞれのモデルは、全体が一連した容姿、スタイルをもちながらも個々の個性というものが、実に巧みに描き分けられている。対象の個性を認めた上で、自らのスタイルの中でそれら個々の個性を描き分け、洗練してゆくのである。

孝則は、多作の作家といわれているが、このことは彼が速筆であり、瞬間を逃さず、一筆一筆を決定的に運ばせようとするその制作態度に係るものであろう。が。このことは、晩年の様式化を招くもとともなったのである。

注目すべき、いま一つのことは、彼の画の多くは、外光と室内光線、及びそれらの反射光をも考慮し、複数の方向の光が交叉したところで、対象をとらえていることである。一定方向から光線を浴びた場合、物体の反対側には陰影ができるが、実際は、その影となった箇所にも必ずなんらかの光が当てられている。彼は陰影部分に照射された反射光を、見事に色で描いている。

彼の描くものは、理想化された空間の中の瞬時瞬時の現象である。彼は、幻想や過去は問題にせず、同時に彼の画は、思想や理念が背景にあって、生み出されるようなことはない。また同時に、真理を霊的に感得しての画でもない。生との対決、生きることの意味といったようなさしせまった思念もその背景にない。彼は、深い苦悩を経ることなく、天性のすぐれた資質を自由闊達に生きた感性の画人といえよう。

同時に彼は、その芸術生活の出発点において「白樺」



裸婦ナックレ（1932）

赤衣の女（1934）

I氏肖像（1936）

派に象徴される一群の人たちのいわば支流に位置し、その芸術生活を「白樺」派同族の一人として、追ってゆくことも可能である。

*

彼の展覧会出品作中の多くは、裸婦をも含めた婦人像であった。第1回から第34回までの一水会への出品作総数は76点、内67点全体のほゞ90%が、婦人像である。文展、日展への出品作総数20点全部、日本国際美術展、現代日本美術展、美術団体連合展等への出品作総数は14点、うち12点が婦人像であった。このように主としてえらんだ婦人像のモチーフは、自然の空間よりも、華麗な人工的空間を好んだ孝則が、それに相応しい素材を選んだということであり、人を愛し、女性を愛する、その人間性のあらわれとも解釈することができるであろう。

晩年には、多くのバラや草花の小品がえがかれたがいずれも人工的なまでに洗練され、彼の芸術世界を小画面の中に展開した。彼の感性は、華やかにして貴族的な、そして西欧的な香り高いバラを、多くの花々の中から選びとった。バラは彼の華麗な空間にもっとも相応しい華麗な花であったのだろう。彼はバラをこよなく愛したと伝えられる。それはあたかも、華やかな人工的空間にふさわしいモチーフとしての女性を、彼が愛したと同じように。

同時に、見忘れてならぬことは、戦時中に、好戦画を彼は全く描いていないという事実である。彼は戦争を支持する思想をもたなかったと同時に、それを積極的に反対する論理も、恐らくは明確に持ってはいなかったと思う。しかしながら、芸術家としての彼の感性が、芸術本来のあり方から離れて、戦争画を描き、間接的にもせよ戦争に加担することを、耐えがたい不快としたのであろう。ここに、なまじの論理より、はるかにすぐれた彼の感性を見ることができると思う。

*

最後に、彼の代表作について、いまひとたびつぶさに見てゆくと、そこに描かれる人物の大きさに驚かされる。50号の画面に佇立し、あるいは椅子に座す女たちを見てみると、画面を視覚的に最大限に大きな空間として用い、その中に描かれた人物も非常に大きく見える。

このことは、画家の気分の大きさを、そのまま示すものであろう。あるいはまた、作者が意識したか否かを問わず、自己をノーブルに顕示する一つの形であるのかも知れない。

我々はそこに、多少とも高貴な生い立ちを経た孝則の、一種壮大な気宇を見る。華麗な空間の中に、華麗な人物や花を配した画面の全体は、鷹揚な、余裕ある彼の気分を表わしている。彼の大きな気宇は、ゆったりした空間と大きな人物を生み、その鋭い感性は、交叉する光の中にあって「機微を捕える」有効なアングルを見つけ、画面に深い造形的効果をあらしめた。彼のすぐれた作品において、この彼の大きな気宇は、背後から作品を支えていたかと思われる。そこに彼の芸術の本質を見る思いがする。

（註）

1)～6)：講談社刊〈現代世界美術全集6ドガ〉別冊「ドガの裸婦に惹かれて」S46P.1　7)：回顧展図録「調査資料ノートより」S50　8)：前出「ドガの絵に惹かれて」P.1　9)：みづゑ267、前田寛治「春陽会展概表」　10)：1874～1954 光風会創立会員　11)：実弟の証言　12)～13)：S33・6毎日新聞「美術人論断」　14)：絵27「自作を語る」　15)：三彩社刊、小崎軍司〈林倭衛〉P.77　16)：ノーベル書房刊〈学習院高等科〉P.184　17)：前出〈林倭衛〉P.79　18)：中央美術T13・10　19)：前出〈林倭衛〉P.81　20)：アトリエ1－2　21)：中央美術T14・10　22)：中央美術T15・7　23)：美術3、9-1　24)：T15・5・20東京朝日新聞　25)：S3・2・26同　26)：みづゑ267　27)：S11・9・5「動いてきた二科」　28)：S11 日本美術年鑑　29)：〈美術五十年史〉　30)：みづゑ628「秋の団体展、ア

カデミズムの現在形と過去形」 31): 昭和16年より晩年の46年に至る30年間、彼は、官展の運営に直接役員として関与した。彼の芸術が展開していった背景として、以下に、彼と共に審査を担当した官展洋画部の実技家たちを、史料として見てゆきたい。第４回（昭和16年）文展審査員：辻永（審査主任）、青山義雄、足立源一郎、奥瀬英三、木下孝則、小磯良平、小山敬二斉藤与里、寺内万治郎、中村研一、長谷川昇、山本鼎第２回（昭和21年）日展審査員：寺内万治郎、佐竹徳次郎、辻永、曽宮一念、硲伊之助、鈴木信太郎、木下義謙、木下孝則、青山義雄、石川寅治、野間仁根、奥瀬英三、中沢弘光、木村荘八、斉藤与里、伊原宇三郎中野和高、石井鶴三、小絲源太郎、大久保作次郎、川島理一郎、中川紀元、伊藤廉、中村善策、安宅安五郎石井柏亭、中村研一、藤田嗣治、長谷川昇／　第５回（昭和24年）日展審査員：石井柏亭、川島理一郎、辻永、中沢弘光、山下新太郎、和田英作、池部鈞、石川寅治、伊原宇三郎、太田喜二郎、鬼頭鍋三郎、木下義謙、木下孝則、小絲源太郎、小山敬三、斉藤与里、高間惣七、田崎広助、寺内万治郎、中野和高、中村研一長谷川昇、森田元子／第６回（昭和25年）日展審査員：石井柏亭、山下新太郎、中沢弘光、川島理一郎、有島生馬、辻永、鈴木千久馬、大久保作次郎、小絲源太郎斉藤与里、小山敬三、太田喜二郎、木下孝則、中村善策、中村琢二、高野三三男、耳野卯三郎、朝井閑右衛門、田村一男、小寺健吉、富田温一郎、三上知治、佐竹徳／第８回（昭和27年）日展審査員：有島生馬、石井柏亭、川島理一郎、辻永、中沢弘光、中村研一、山下新太、大久保作次郎、木下孝則、小絲源太郎、小山敬三、斉藤与里、鈴木千久馬、三上知治、安宅安五郎池部鈞、大沢海蔵、緒方亮平、田中繁吉、富田温一郎中村善策、耳野卯三郎※この年、参事をつとめた。／第10回（昭和29年）日展審査員：有島生馬、石井柏亭川島理一郎、辻永、中沢弘光、中村研一、山下新太郎和田英作、大久保作次郎、木下孝則、小絲源太郎、小山敬三、斉藤与里、鈴木千久馬、三上知治、荒谷直之介、有馬三斗枝、井手宣通、奥瀬英三、倉員辰雄、佐藤一章、田崎広助、富田温一郎、森田元子、山喜多二郎太、山田新一、※この年、参事をつとめた。／第11回（昭和30年）日展：※この年、参事をつとめた。／第12回（昭和31年）日展審査員：有島生馬、石井柏亭川島理一郎、辻永、中沢弘光、中村研一、山下新太郎大久保作次郎、木下孝則、小絲源太郎、小山敬三、斉藤与里、佐竹徳、鈴木千久馬、耳野卯三郎、三上知治伊藤清永、河井清一、田中繁吉、田村一男、中村琢二楢原健三、西山真一、森田茂※この年、参事をつとめた。／第１回（昭和33年）日展第二科〈洋画　審査員理事：長谷川昇（審査主任）中村研一、石井柏亭。評議員：大久保作次郎、田崎広助、木下孝則、三上知治小絲源太郎、耳野卯三郎、斉藤与里、森田元子、鈴木千久馬、会員：大沢海蔵、倉員辰雄、新審査員：笹岡了一、納富進、土佐林豊夫／第４回（昭和36年）日展第二科〈洋画〉審査員、理事：中村研一（審査主任）有島生馬、寺内万治郎、評議員：大久保作次郎、三上知治、木下孝則、耳野卯三郎、鈴木千久馬、棟方志功田崎広助、会員：有馬三斗枝、堀田清治、笹鹿彪、南政善、森田茂、新審査員：安宅虎雄、新保兵次郎／第６回（昭和38年）日展第二科〈洋画〉審査員、理事：有島生馬（審査主任）中村研一、鬼頭鍋三郎、寺内万治郎、評議員：伊原宇三郎、胡桃沢源一、江藤純平、高光一也、奥瀬英三、野島重之、木下孝則、高野三三男倉員辰雄、中野和高、会員：平通武男、山下忠平、岩井弥一郎、柚木久太、大河内信敬、遠山清、新審査員上田哲農、辻朗、大内田茂士、舟木徳重、杉村惇／第９回（昭和41年）日展第二科〈洋画〉審査員、理事：中村研一（審査主任）大久保作次郎、川島理一郎、小山敬三、長谷川昇、評議員：伊藤清栄、江藤純平、胡桃沢源一、伊原宇三郎、高野三三男、島野重之、緒方亮平、高光一也、大沢海蔵、楢原健三、奥瀬英三、西山真一、木下孝則、渡辺浩三、倉員辰雄、会員：新保兵次郎、松田忠一、新審査員：伊藤正、川口雄男、飯田弥生、不破章、大島士一

32）S 16・10　東京朝日新聞

Ⅰ 主 要 行 事

4月13日～5月6日	吉田政次遺作展（和歌山県立近代美術館主催）
5月12日	和歌山県美術家協会理事会ならびに昭和49年度定期総会
5月18日	第12回県美術家協会展運営委員会
6月2日	近代美術館友の会理事会ならびに評議員会
6月13日	第12回県美術家協会展（県美術家協会と共催）
	第１期＝13日～17日〈写真、洋画、現代造形、彫塑〉
	第２期＝20日～24日〈日本画、書、工芸〉
6月23日	京都市美術館「セザンヌ展」見学バスツアー（近代美術館友の会主催）
7月3日～8月29日	昭和49年度前期、近代美術館常設企画展
7月28日	信楽陶芸祭バスツアー（近代美術館友の会主催）
8月7日～8月12日	第９回県立近代美術館友の会展（近代美術館友の会主催）
9月4日～9月8日	第７回和歌山県勤労者美術展（和歌山県と共催、日本画、洋画、彫塑、工芸、書、写真、生花）
9月26日～9月29日	能登半島一周、加賀方面歴史の旅鑑賞バスツアー（近代美術館友の会主催）
10月12日～11月4日	硲伊之助展（和歌山県立近代美術館主催）
11月16日～12月5日	第28回県展（県教育委員会、毎日新聞和歌山支局と共催）
	第１期＝16日～21日〈日本画、書、生花〉
	第２期＝23日～28日〈写真、工芸、現代造形〉
	第３期＝30日～12月5日〈洋画、彫塑〉
12月14日～12月16日	第28回県展新宮地方展〔新宮市教育委員会が共催に加わる。各部門選抜（除生花）〕
12月7日	近代美術館協議会開催（役員改正があり、会長、副会長再選される。）
1月9日～2月24日	昭和49年度後期、近代美術館常設企画展
2月19日～2月24日	第８回県立近代美術館友の会習作展（近代美術館友の会主催）
2月19日～2月20日	第89回関西博物館連盟例会（当館当番館のため、那智勝浦町「浦島」に於て開催する。）
3月1日～3月23日	館蔵品による和歌山の作家展（近代美術館主催）

2　主催展覧会（企画展）

「吉田政次遺作展」

会期　4月13日～5月6日（入場者数1,554人）
主催　和歌山県立近代美術館
後援　和歌山県美術家協会　吉備町　有田地方教育委員会連絡協議会　有田地方美育協会　和歌山県立近代美術館友の会

近代日本美術の展開の中で、すぐれた業績をのこした本県出身の作家をとりあげる「郷土作家シリーズ」は、本館の重要な事業として、継続して実施してきた。「吉田政次遺作展」もこの一環としてとりあげた展覧会である。

吉田政次は、大正6年本県吉備町に生まれた。東京美校卒業後モダンアート協会で抽象画を描いていたが、昭和29年ごろから木版画を始めた。戦後、美術の国際交流が盛んになり、とりわ　版画の分野においても日本作家の活躍はめざましいものがあるが、吉田政次も、こういった風潮の中から頭角を現わした木版画家である。32年国際版画展ビエンナーレ新人賞、44年第8回国際デッサン展で1等賞（ミロ賞）、同年国際版画展で最高賞を受賞するなど、その画業は国際的に高く評価されている。

本展覧会は初初期から晩年に至るまでの木版画、油絵、デッサン等150点余を展　し、その足跡を回顧した。

出品目録

1	LOVE №1	木版・紙	31.4×40.6	1950	
2	相　愛 №1	〃　〃	36.0×42.8	〃	第18日本版画協会展
3	相　愛 №2	〃　〃	37.0×42.0	〃	第18日本版画協会展
4	相　愛 №4	〃　〃	43.0×37.5	〃	第18日本版画協会展
5	静 №19	〃　〃	33.0×18.4	1952	第21日本版画協会展
6	静 №15	〃　〃	24.5×17.0	1953	
7	静 №22	〃　〃	37.0×15.0	〃	第21回日本版画協会展
8	静 №29	〃　〃	33.0×24.0	〃	日本・スペイン版画交歓展 第21回日本版画協会展
9	静 №32	〃　〃	73.0×49.5	〃	第3回モダンアート展
10	静 №34	〃　〃	59.0×43.0	〃	
11	静 №36	〃　〃	37.0×26.5	〃	
12	静 №49	〃　〃	15.0×38.0	1954	第4回モダンアート展
13	静 №51	〃　〃	53.0×79.5	〃	第4回モダンアート展
14	静 №55・残されたもの	〃　〃	60.0×45.0	〃	第4回モダンアート展
15	静 №61・残されたもの	〃　〃	45.0×53.0	〃	第22回日本版画協会展
16	静 №64・朝	〃　〃	25.0×49.5	〃	
17	静 №68・夕	〃　〃	25.0×49.5	〃	第23回日本版画協会展
18	静 №70	〃　〃	32.5×40.0	1955	
19	森の精 №1	〃　〃	56.0×82.5	〃	第24回日本版画協会展
20	森の精 №6	〃　〃	59.5×38.0	〃	
21	森の精 №9	〃　〃	38.3×61.0	〃	
22	清　楚 №1・女優SH嬢の映像	〃　〃	60.5×91.5	〃	第5回モダンアート展
23	FOUNTAIN №1	〃　〃	45.0×38.0	1956	
24	地の泉 №1	〃　〃	56.0×82.5	〃	第6回モダンアート展 第8回選抜秀作美術展
25	新しい星 №1	〃　〃	60.0×47.5	〃	日本現代版画ー創作版画展（シカゴ）日本現代版画展（オレゴン）
26	土 №3	〃　〃	41.0×19.8	〃	タトル現代日本版画コンクール
27	新しい発生 №2	〃　〃	43.0×37.5	〃	第7回モダンアート展

28	哀愁記	木版・紙	170.5×307.0	1957	今日の新人'57年展　戦後の秀作
29	憂愁の空 №1	〃　〃	44.6×62.7	〃	第1回東京国際版画ビエンナーレ展
30	憂愁の空 №2	〃　〃	43.5×72.0	〃	第1回東京国際版画ビエンナーレ展
31	閃　光	〃　〃	43.5×28.5	1958	第1回東京国際版画ビエンナーレ展
32	京都と苔	〃　〃	48.0×75.0	〃	現代日本版画アメリカ移動展
33	静 №74・流れ	〃　〃	75.0×89.5	〃	
34	雷 №1	〃　〃	45.0×37.0	〃	オーストラリア巡回現代日本版画展（ニューヨーク）
35	苔 №1	〃　〃	44.5×29.5	〃	現代日本版画展（ニューヨーク） 日本版画展（マイアミ）
36	幽　玄 №1	〃　〃	41.0×26.0	1959	上野出7人展
37	相対性絵画 №1	〃　〃	155.0×312.0	〃	第5回サンパウロ・ビエンナーレ展
38	相対性絵画 №5	〃　〃	157.0×157.0	〃	第27回日本版画協会展
39	静　寂 №1	〃　〃	155.0×155.0	〃	モダンアート10周年展
40	昔 №4	〃　〃	60.5×60.5	1960	第4回現代日本美術展
41	空　間 №2	〃　〃	60.0×60.0	〃	モダンアート10周年展　第28回日本版画協会展
42	空　間 №5	〃　〃	155.0×158.0	〃	
43	空　間 №6	〃　〃	60.5×60.5	〃	第4回現代日本美術展
44	空　間 №8	〃　〃	74.5×41.0	〃	第31回日本版画協会展　第2回東京国際版画ビエンナーレ展
45	雷 №5	〃　〃	33.0×33.5	1961	
46	雷 №6	〃　〃	37.0×40.0	〃	
47	暮　色 №2	〃　〃	30.5×46.0	〃	上野出7人展
48	無　限 №4	〃　〃	74.5×40.5	〃	第29回日本版画協会展
49	無　限 №6	〃　〃	60.5×60.5	〃	第6回日本国際美術展
50	空　間 №11	〃　〃	60.5×60.5	〃	第11回モダンアート展
51	空　間 №13	〃　〃	45.0×45.0	〃	リュブリアナ国際版画展　第30回日本版画協会展
52	空　間 №14	〃　〃	57.0×57.0	1962	第30回日本版画協会展　第8回サンパウロビエンナーレ展
53	空　間 №15	〃　〃	57.0×57.0	〃	第5回現代日本美術展　第1回日本芸術祭国内展示
54	空　間 №17	〃　〃	57.0×57.0	〃	第30回日本版画協会展　第8回サンパウロビエンナーレ展
55	空　間 №23	〃　〃	57.0×57.0	〃	第3回東京国際版画ビエンナーレ展
56	空　間 №28	〃　〃	57.0×57.0	1963	第31回日本版画協会展　現代日本版画展（ローマ）
57	空　間 №38	〃　〃	30.8×30.8	〃	第6回現代日本美術展
58	空　間 №43		57.0×57.0	1964	
59	芸術の壁 №1・№2	〃　〃	108.0×210.0	〃	第4回東京国際版画ビエンナーレ展
60	空　間 №44	〃　〃	57.0×57.0	1965	

61	空　間　№48	木版・紙	57.0 × 57.0	1957	リュブリアナ国際版画展　第8回サンパウロビエンナーレ展
62	空　間　№50	〃　〃	45.0× 43.0	〃	第33回日本版画協会展　第17回選抜美術秀作展
63	壁の中の白　№2	〃　〃	60.0× 60.0	〃	
64	壁の中の白　№5	〃　〃	61.0× 61.0	〃	第33回日本版画協会展　第1回日本芸術祭国内展示
65	我が宇宙　№1	〃　〃	213.0×216.0	1965	第1回ジャパン・アート・フェスティバル　風2曲
66	空　間　№52	〃　〃	45.0× 43.0	〃	第5回東京国際版画ビエンナーレ展　現代日本版画展（ジュネーブ）
67	壁の中の白　№7	〃　〃	61.0× 61.0	1966	第7回現代日本美術展
68	こだま　№1	〃　〃	60.0× 45.0	1967	第9回サンパウロ・ビエンナーレ展
69	除夜の鐘　№1	〃　〃	60.5× 46.0	〃	第35回日本版画協会展　第9回サンパウロ・ビエンナーレ展
70	除夜の鐘　№2	〃　〃	60.5× 46.0	〃	第9回サンパウロ・ビエンナーレ展
71	余　韻　№2	〃　〃	60.5 × 45.5		第35回日本版画協会展　第9回サンパウロ・ビエンナーレ展
72	余　韻　№4	〃　〃	60.5 ×45.5		第9回サンパウロ・ビエンナーレ展
73	大地の響き	〃　〃	91.0 × 61.0	〃	第7回現代日本美術展
74	長崎の鐘	〃　〃	41.0 × 45.0	〃	
75	雑草の歌	〃　〃	46.0 × 41.5	〃	
76	ミニとデモの時代	〃　〃	87.0 × 72.0	1968	第6回東京国際版画ビエンナーレ展　第1回バルセロナ国際版画展
77	流行と女性	〃　〃	91.5 × 72.0	〃	第6回東京国際版画ビエンナーレ展　第1回バルセロナ国際版画展
78	躍動する心　№1	〃　〃	79.0 × 70.0	〃	第36回日本版画協会展　イギリス国際版画ビエンナーレ展
79	躍動する心　№2	〃　〃	87.0 × 72.0	〃	イギリス国際版画ビエンナーレ展
80	躍動する心　№3	〃　〃	86.0 × 72.0	〃	第8回現代日本美術展
81	躍動する心　№6	〃　〃	86.0 × 72.0	〃	第8回現代日本美術展
82	箱入り娘	〃　〃	87.0 × 72.0	〃	第37回日本版画協会展
83	熱　砂　№1	〃　〃	60.5 ×46.0	〃	個　展
84	凱旋門　№1	〃　〃	41.5 × 30.0	〃	個　展
85	凱旋門　№3	〃　〃	41.5 × 30.0	〃	個　展
86	凱旋門　№7	〃　〃	41.5 × 30.0	〃	個　展
87	青春の輝き　№2	〃　〃	87.0 × 72.0	1969	
88	メキシコ　№1	リフトグラフ・紙	54.5 × 39.5	1968	個　展
89	幻　影	〃　〃	40.0 × 30.0	〃	個　展
90	田園讃歌	エッチン　・〃	36.0 × 24.5	〃	個　展
91	生命の発生	〃　〃	36.0 × 24.5	〃	個　展
92	裸　婦	油彩キャンバス	73.0 × 53.0	1938	
93	裸　婦	〃	61.0 × 45.5	〃	
94	失　題	〃	100.2 × 65.3	1940	
95	聖歌者〔東光会展出品〕	〃	100.0 × 69.5	1947	
96	聖歌者	〃	116.5 × 90.8	〃	
97	戦後の神田風景・末広町	〃	116.8 × 90.5	1949	

98	バレリーナの夢	油彩キャンバス	112.0 ×146.0	1951
99	静	〃	73.0 × 50.5	〃
100	静	〃	100.2 × 65.0	〃
101	裸　婦	〃	33.5 × 24.5	1956
102	裸　婦	〃	41.0 × 32.0	1965
103	作　品	〃	41.0 × 32.0	1969
104	作　品	〃	41.0 × 32.0	〃
105	作　品	〃	41.0 × 32.0	〃
106	作　品	〃	41.0 × 32.0	〃
107	海	〃	32.1 × 41.2	〃
108	裸婦デッサン	ペン・紙	53.2 × 38.0	1953
109	裸婦デッサン	〃	53.8 × 38.2	1955
110	裸婦デッサン	〃	38.3 × 59.0	〃
111	裸婦デッサン	〃	38.5 × 54.6	1964
112	裸婦デッサン	〃	54.6 × 38.5	〃
113	裸婦デッサン	〃	37.5 × 29.3	1965
114	裸婦デッサン	〃	50.5 × 35.7	〃
115	裸婦デッサン	〃	45.5× 37.0	1966
116	デッサン「田園讃歌」	ペン・筆・紙	63.0 × 50.0	1968
117	デッサン「朝」	〃	63.0 × 50.0	〃
118	デッサン「雲はおどる」	〃	63.0 × 50.0	〃
119	カット・デッサン	ペン・紙	14.3 × 10.0	
120	カット・デッサン	〃	14.5 ×13.0	
121	カット・デッサン	〃	12.5 × 12.5	
122	カット・デッサン	〃	13.0 × 12.0	
123	カット・デッサン	〃	13.6 × 13.0	
124	カット・デッサン	〃	20.0 × 13.8	
125	朝日新聞のためのカットデッサン	〃	25.0 × 19.8	
126	〃・カット・デッサン	〃	25.0 × 19.8	
127	〃・カット・デッサン	〃	25.0 × 19.8	
128	〃・カット・デッサン	〃	25.0 × 19.8	
129	〃・カット・デッサン	〃	25.0 × 19.8	
130	水　浴	木版・紙	17.0 × 23.0	
131	プロフィール	〃	25.3 × 35.0	1963
132	表紙のための作品	〃	15.6 × 23.5	
133	〃「海と少女」	〃	25.0 × 35.0	1963
134	〃「栗と少女」	〃	22.5 × 30.0	1965
135	小　品	〃	22.8 × 36.9	
136	小　品	〃	22.2 × 30.9	
137	赤	〃	6.0 × 5.0	
138	青	〃	6.5 × 5.0	
139	山	〃	10.0 × 14.9	
140	富士山	〃	10.0 × 15.0	
141	小　品	〃	22.6 × 30.9	
142	小　品	〃	20.8 × 30.9	
143	カット	〃	8.5 × 8.5	
144	カット	〃	6.0 × 9.5	
145	カット	〃	21.5 × 12.0	

146	カット	木版・紙	13.3× 22.4
147	カット「炎」	石彫・紙	9.8× 13.9
148	カット「母子」	〃	13.8× 10.0
149	カット「母子」	〃	14.0× 10.0
150	カット	〃	13.8× 9.1
151	はりえ	紙	20.5× 15.7
152	はりえ	〃	20.5× 15.7
153	デッサン（スケッチブック）		26.3× 17.8
154	水彩下絵（スケッチブック）		45.7 × 37.0
155	水彩下絵（スケッチブック）		45.7 × 37.0
156	版　木（表紙のための作品）	桜	
157	版　木（憂愁の空）	ベニヤ板	
158	版　木（空間№44＊4枚）	〃	

「昭和49年度前期　県立近代美術館常設企画展」

会　期　7月4日～8月29日（毎週火曜日休館）

館蔵品を主体とする本県出身作家の絵画（油彩画、日本画、版画）を展観

出　品　目　録

1	石垣栄太郎	ボーナスマーチ	油彩キャンバス	147 ×106	1932	
2	〃	恐　怖	〃	64 ×104	1940	
3	〃	女の肖像	〃	35 × 28	1936	
4	川口　軌外	黄　壁	〃	59.2 × 72.3	1927~8	第1回独立美術展
5	〃	スブニール	〃	116.5 × 80.4	1932	第2回独立美術展
6	〃	エスキースB	〃	161.5 ×130.5	1937	第7回独立美術展
7	〃	樹間と鳥	〃	193.0 ×130.0	1958	第3回現代日本美術展
8	〃	風　景	〃	65 × 80.5	1925	
9	〃	少女と子供	〃	116.0 × 91.0	1937	
10	原　勝四郎	母子像	油彩ボール紙	64.8 × 53	1930	
11	〃	小　湾	〃	70 × 82	1940	
12	〃	静　物	油　彩　板	38.5 × 45.5		
13	〃	裸　婦	油彩キャンバス	51.3× 63.0	1959~60	
14	高井　貞二	金と銀	〃	188 ×178.5		
15	〃	赤い糸	〃	194 × 73	1967	
16	保田　龍門	自画像	〃	45 × 38		二科会

17	保田　龍門	読　書	油彩キャンバス	65 × 53	1921	
18	ヘンリー杉本	Young Americans	〃	162 ×130	1966	
19	〃	Paris in Autumn	〃	140 ×130	1965	
20	〃	パン配達娘	〃	90 × 70	1963	
21	吉田　政次	芸術の壁　№1	木版・紙	108 × 210	1964	
22	〃	〃　№2	〃	〃	〃	
23	〃	静　寂　№1	〃	155 × 78	1959	
24	〃	相対性絵画№5	〃	85 ×182	〃	
25	野長瀬晩花	スペインの子供	紙・着彩	136 × 110	1924	第4回国画創作協会展

「硲伊之助展」

会　期　10月12日～11月4日（入場者数　2,173人）

主　催　和歌山県立近代美術館

後　援　和歌山県美術家協会　下津町　海草地方教育委員会連絡協議会　海草地方美育協会　和歌山県立近代美術館友の会

郷土作家シリーズの一環として、今回は、油彩画、水彩画、版画、陶器と巾広い制作活動を続ける硲伊之助をとりあげた。

硲伊之助は、明治28年（1895）東京本所に生まれたが、両親は共に和歌山県海草郡加茂村（現下津町）の出身である。慶応義塾普通部在学中の明治44年（1911）大下藤次郎の日本水彩画研究所に入り、翌大正元年（1912）フューザン会の結成に参加。更に大正3年（1914）と7年（1918）の2回、二科に出品、二科賞を受賞している。

大正10年から8年余りをフランスで過ごしたが、この間、大正12年頃、春陽会の会員に推され、帰国後昭和6年日本版画協会の創立に参加し、8年二科に移籍した。同年、再度フランスに渡り、アンリ・マティスに親しく学ぶ機会を得、2年間滞在の後帰朝。11年、二科を退会、翌12年、一水会を興した。17年より文展審査員を二度勤め、戦後21年に日本美術会を結成、30年より2年間、日展審査員の席にあった。近年は、ひたすら、陶器の制作に励んでいる。

本展覧会は、初期から現在に至るまでの、硲芸術の展開を、主要な作品を通して、概観しょうをするものであったが、二科会、春陽会時代の優作の多くが、散逸焼失し、展観できなかったことは残念である。しかしながら、写実的な作風をとおして、硲伊之助独自の洗練された世界をうかがうことができ、同時に大正、昭和初期に日本人画家達がヨーロッパの芸術とどう関わっていったか、またその後の芸術思潮にどう対応していったかを、一つの典型として見ることができたと思う。

出　品　目　録

1	村の入口（別名・ブザンソン風景）	油彩キャンバス	90.9× 65.1	1924	第5回春陽会展
2	ブザンソン風景	〃	50.0× 60.6	1924	
3	室　内	〃	80.3× 60.6	1928	第6回春陽会展
4	遠眼鏡	〃	41.0× 32.0	1934	
5	室より（別名・南仏のバルコン）	〃	100.0× 72.7	1935	第22回二科会展
6	ニース海岸通り	〃	100.0× 80.3	1935	第22回二科会展
7	鐘　楼	〃	65.4× 80.6	1935	第22回二科会展
8	あぢさゐ	〃	65.0× 50.0	1938	第2回一水会展
9	清宴舫（別名・昆明湖）	〃	60.6× 80.3	1938	第2回一水会展
10	水　仙	〃	33.3× 53.0	1939	第3回一水会春
11	矢車草	〃	72.7× 53.0	1940	第4回一水会展
12	お茶のあと	〃	60.6× 45.5	1941	第5回一水会春
13	燈　下	〃	100.0× 80.3	1941	第5回一水会展
14	黒服のI令嬢	〃	80.3× 65.1	1942	第5回文展

15	PIED・DE・VEAU	油彩キャンバス	72.7 × 53.0	1943	
16	金　魚	〃	53.0 × 40.9	1943	文化学院展
17	ひまわり	〃	100.0 × 72.7	1943	第7回一水会展
18	黄八丈のＩ令嬢	〃	80.3 × 65.1	1946	第1回日展
19	A・LA・CAMPAGNE	〃	53.0 × 72.7	1946	第8回一水会展
20	MONSIEUR・BONAT	〃	91.5 × 73.0	1947	第1回美術連合展
21	水　仙〔赤いマフラーと黒衣の女〕	〃	53.0 × 45.5	1948	第10回一水会展
22	アンゴラのセーター	〃	80.3 × 65.1	1949	第3回美術連合展
23	芸居がえり（春信模写）	〃	100.0 × 80.3	1951	第5回美術連合展
24	パオロ君	〃	80.3 × 65.1	1952	第14回一水会展
25	富士遠望	〃	65.1 × 90.9	1960	
26	山つつじ	〃	53.0 × 40.9	1960	
27	麦　秋	〃	90.9 × 65.1	1960	三人展（於岡山）
28	矢車草（籠）	〃	53.0 × 72.7	1961	
29	河口湖夕照	〃	72.7 × 90.9	1961	三人展（於岡山）
30	渓　流	〃	65.1 × 80.3	1961	三人展（於岡山）
31	竜王と浄土	〃	72.7 × 100.0	1961	
32	美松坂	〃	60.6 × 80.3	1961	
33	天狗平	〃	40.9 × 53.0	1961	
34	スイトピー	〃	45.5 × 33.4	1962	
35	天の橋立	〃	65.1 × 90.9	1962	
36	トルコ桔梗	〃	40.9 × 31.8	1962	
37	メッシ橋	〃	60.6 × 80.3	1965	アルバニア展
38	アルバニアの老人	〃	60.6 × 72.7	1965	アルバニア展
39	ポリクセニ嬢とムカイ氏の会話	〃	80.3 × 100.0	1965	アルバニア展
40	サランダの港	〃	33.4 × 45.5	1965	アルバニア展
41	ジロカステロの古い家	〃	40.9 × 53.0	1965	アルバニア展
42	煙草畑の耕作者たち	〃	72.7 × 90.9	1965	アルバニア展
43	花　嫁	〃	80.3 × 100.0	1965	アルバニア展
44	渚	〃	65.1 × 90.9	1970	
45	潮岬夕照	〃	80.3 × 65.1	1970	
46	コルシカ島にて	水彩・紙	33.5 × 41.0	1921	
47	ブローラ〔アルバニア風景〕	〃	30.0 × 42.5	1965	
48	第1回ヒュウザン会展ポスター	木版・紙	26.0 × 68.0	1911	（参考出品）
49	マントンの回教寺	〃	39.2 × 28.0	1930	第8回春陽会展
50	金鳳花	〃	29.5 × 39.0	1931	第9回春陽会展
51	大きなパルミエ	石版・紙	52.0 × 69.0	1935	第22回二科会展
52	尼　寺	〃	65.0 × 52.3	1935	第22回二科会展
53	ニース海外通り	〃	47.5 × 67.5	1935	第22回二科会展
54	南仏の村	〃	50.0 × 63.0	1935	第22回二科会展
55	朝　顔	〃	74.2 × 53.5	1935	第22回二科会展
56	台　所	〃	73.2 × 53.2	1935	第22回二科会展
57	鐘　楼	〃	50.0 × 65.6	1935	第22回二科会展
58	ニース海水浴場	〃	53.7 × 67.2	1935	第22回二科会展
59	堤　防	〃	52.6 × 64.4	1935	第22回二科会展
60	ルシアノ像	〃	49.5 × 58.0	1934	
61	水　禽	木版・紙	20.0 × 28.0	1942	
62	潮　来	〃	68.0 × 50.0	1953	第9回日展

63	あやめ	木版・紙	38.5 × 50.6	1955	第11回日展
64	夏の夜	石版・紙	40.0 × 29.0	1956	
65	九谷染付上絵皿　羅馬サンタンジェロ城		径21.0	1952	第5回日本アンデパンダン展
66	九谷黒釉白菊之皿		径24.0	1953	
67	九谷染付皿　秋		径20.1	1954	
68	九谷上絵紅梅香炉		径6.0 ×高6.8	1956	第18回一水会展
69	九谷上絵透彫狆之菓子鉢		径21.0	1956	
70	九谷上絵木蓮とふくろ図大皿		径45.0	1965	
71	九谷染付大皿　公子像		径45.0	1957	
72	九谷本窯くちなし大皿		径25.0	1960	
73	九谷染付大皿　公子像		径45.0	1960	第25回一水会展
74	九谷上絵茄子の皿（五客）		径19.0	1962	
75	九谷本窯月見草大皿		径54.0	1963	第25回一水会展
76	吸坂手鷺絵中皿（五客）		径24.0	1965	
77	九谷染付渓流之詩人大皿		径45.0	1966	第28回一水会展
78	九谷上絵麦畑之道大皿		径38.0	1966	第28回一水会展
79	九谷染付上絵入額皿　備前古窯跡		18.0 × 21.0	1967	
80	九谷染付絵入大皿　アルバニアの老夫人		径45.0	1967	
81	九谷染付上絵大皿　天の橋立の老松		径45.0	1967	
82	九谷上絵吸坂釉額皿　閨秀画家		18.0 × 21.0	1967	
83	吸坂手瓢形小皿　赤いブラウスの公子		径14.5	1967	
84	吸坂手瓢形露草小皿（五客）		径14.5	1967	
85	吸坂手瓢形夫婦鶴小皿（五客）		径14.5	1967	
86	吸坂窯小判形小皿　眠れるチビ公（五客）		径18.0 ×径11.0	1967	
87	九谷呉須上絵大皿　アルバニアの案山子		径45.0	1968	
88	吸坂手くちなし小判形皿（五客）		径18.0 ×径11.0	1968	
89	九谷黒釉壺		径24.5 ×高25.5	1969	
90	九谷上絵大皿　南紀串本海岸の黒い家		径45.0	1970	
91	九谷上絵大皿　串本風景		径54.0	1970	
92	九谷上絵瓢形小皿　京劇にて（五客）		径14.5	1970	
93	九谷上絵付吸板　かけす小皿（五客）		径16.0	1970	
94	九谷瑠璃釉山吹之大皿		径45.0	1970	
95	九谷瑠璃釉手鉢		径19.0 ×高14.0	1970	
96	吸坂手九谷上絵山帰来大皿		径40.0	1970	
97	吸坂窯向附　夜の丘（五客）		径 8.6 ×高 9.5	1970	
98	吸坂窯角形小皿　黄色い花（五客）		径16.3	1970	
99	九谷上絵夜の月見草大皿		径45.0	1971	
100	九谷呉須上絵大皿　蓑掛島之景		径60.0	1971	
101	黒釉九谷色絵八寸皿　葵の花		径24.0	1971	
102	吸坂窯象嵌あやめ大鉢		径39.0	1971	
103	九谷本窯陶板　春の箱根街道		26.8 × 35.0	1972	
104	九谷上絵小菊大皿		径45.0	1972	
105	吸坂手九谷上絵鴛鴦八寸皿		径42.0	1972	
106	吸坂手呉須上絵大皿　新緑のなかのひと		径43.0	1972	
107	九谷本窯陶板　春の三島街道		28.0 × 38.0	1973	
108	九谷上絵新聞小皿（五客）		径11.5	1973	
109	九谷呉須上絵男鹿半島ほにょ大皿		径45.0	1973	
110	九谷呉須上絵夏樹立大皿		径45.0	1973	

111	吸坂窯小判草九角皿	径35.0	1973
112	九谷本窯釉裏紅鍬器粟と矢車草中皿(五客)	径 7.0	1974
113	装訂「仕事部屋」(井伏鱒二著・春陽堂刊)		1931
114	解説「コロ画集」(アトリエ社刊・青果堂刊)		1932
115	装訂・挿絵「絵入みよ子」(佐藤春夫著・青果堂刊)		1933
116	装訂・挿絵「砧村雑唱」(北原白秋著)		1933
117	解説「アンリ・マティス」(アトリエ社刊)		1938
118	解説「ギュスタヴ・クウルベ」		1941
119	随筆「パリの窓」(読売新聞社刊)		1952
120	翻訳「ゴッホの手紙・上」(岩波書店刊)		1955
121	〃「 〃 中」(〃)		1961
122	〃「 〃 下」(〃)		1970
123	装訂・挿絵「プールサイド小景」(庄野潤三著・牧羊社刊)		1973

「昭和49年度後期　県立近代美術館常設企画展」

会　期　50年1月9日～2月23日(毎週火曜日休館)

館蔵品を主体とする本県出身作家の絵画(油彩画、日本画、版画)を展観。

出　品　目　録

1	石垣保太郎	K.K.K	油彩キャンバス	73 × 92	1937	
2	〃	地獄へ	〃	105 × 71	1942	
3	川口　軌外	窓辺の静物	〃	74.9 × 64.7	1924~6	
4	〃	スブニール	〃	116.5 × 80.4	1932	第2回独立美術展
5	〃	老　人	〃	114.4 × 71.1	1927~8	第5回1930年協会展
6	〃	水浴する人たち	〃	116.5 × 90.7	1955	第3回日本国際美術
7	〃	鳥と人	〃	115.8 × 79.8	1956	
8	〃	熊野灘	〃	161 × 129.8	1940	紀元2600年展
9	原　勝四郎	バ　ラ	油彩板	53 × 45	1961	
10	〃	道　化	油彩ボール紙	89 × 72	1941	
11	〃	仰臥裸婦	〃	45.1 × 37.8	1930	
12	保田　龍門	村の娘	油彩キャンバス	83 × 67.5	1915	
13	〃	パリ風景	〃	46 × 54	1922	
14	ヘンリー杉本	South Ferry New York	〃	162 × 130	1967	
15	〃	Longing	〃	〃	1968	
16	〃	モレー洗濯場	〃	90 × 71	1964	
17	吉田　政次	空間 No.5	木版(屏風)	155 × 79	1960	
18	〃	相対性絵画 No.6	木版(屏風)	157 × 78	1959	
19	国枝　金三	島の四月	油彩キャンバス	65.3 × 80.2	1917	
20	〃	卓上静物	〃	60.6 × 72.7	1919	
21	〃	麗　日	〃	90.8 × 72.2	1939	
22	高井　貞二	作　品	〃	137 × 132	1962	
23	木下　義謙	横たはれる裸婦	〃	76.5 × 121	1925	第13回二科展(受賞)
24	伊之助	ブザンソンの風景	〃	49 × 59.5	1924	

館蔵品による〈和歌山の作家〉展

会　期　昭和50年3月1日～23日

館蔵品中より、本県関係12作家の洋画、版画、彫刻など90点を展観。従来の常設企画展の規模をさらに大きくしたものである。

出　品　目　録

1	川口　軌外	風　景	油彩キャンバス	64.7 × 79.7	1924
2	〃	静　物	〃	72.0 × 59.3	1925
3	〃	裸婦群像	〃	873 × 94.5	〃
4	〃	黄　壁	〃	59.2 × 72.3	1927~28
5	〃	写　像	〃	116.0 × 88.3	1927
6	〃	車のある日景	〃	73.4 × 116.5	1928
7	〃	ボヘミアン	〃	130.0 × 96.0	1928
8	〃	静　物	〃	115.1 × 78.7	1932
9	〃	地	〃	193.5 × 154.5	1932
10	〃	花	〃	115.0 × 88.8	1932
11	〃	少女と貝殻	〃	185 × 288	1934
12	〃	無　題	〃	160.5 × 112.0	1935
13	〃	エスキースB	〃	161.5 × 130.0	1937
14	〃	二　婦	〃	161.5 × 130.0	1943
15	〃	ひまわり	〃	72.9 × 91.0	1943
16	〃	群　像	〃	116.7 × 73.0	1941
17	〃	光	〃	115.0 × 80.0	1950
18	〃	花	〃	98.9 × 71.6	1951
19	〃	鳥の情態	〃	129.0 × 88.0	1952
20	〃	コンポジション	〃	116.7 × 86.2	1953
21	〃	夏の浜	〃	115.1 × 89.9	1955
22	〃	人　体	〃	80.2 × 116.8	1957
23	〃	樹間と鳥	〃	193.0 × 130.0	1958
24	〃	三つのポーズ	〃	160.0 × 129.5	1959
25	〃	田舎と人	〃	119.5 × 89.0	1953
26	伊之助	村の入口	〃	65.5 × 92	1924
27	〃	ひまわり	〃	100 × 80.5	1943
28	木下　義謙	婦人像	〃	116.5 × 73.3	1928
29	〃	九谷の渓流	〃	91.5 × 122	1945
30	保田・竜門	読　書	〃	65 × 53	1921
31	〃	裸婦立像	〃	81 × 65	1921~3
32	原　勝四郎	画工像	油彩ボール紙	65 × 53	1932
33	〃	婦人像	〃	72.4 × 60.0	1934
34	〃	小　湾	〃	70 × 82	1940
35	〃	婦人像	〃	73 × 60	1953
36	〃	裸　婦	油彩キャンバス	51.3 × 63	1960頃
37	石垣栄太郎	街	〃	122 × 90	1925
38	〃	ボーナスマーチ	〃	147 × 106	1932
39	〃	スケッチクラス	〃	56 × 72	1947
40	ヘンリー杉本	カーメルハイランド海辺	〃	79 × 98.5	

41	ヘンリー杉本	モレー洗濯場	油彩キャンバス	90 × 71	1964
42	〃	Eaith Love Hope	〃	162 × 130	1966
43	高井　貞二	赤と金	〃	188 × 178.5	1962
44	〃	赤い糸	〃	194 × 173	1967
45	浜口　端三	毛糸とトリコット	エッチング	24.3 × 51.9	1962
46	〃	カレイとぶどう	〃	29.3 × 39.0	
47	〃	コップ	〃	29.2 × 39.4	
48	〃	ざくろ	〃	29.2 × 44.0	1958
49	〃	黒いサクランボ	〃	19.6 × 24.5	
50	〃	花と蝶	〃	11.4 × 11.4	
51	〃	19と1つの桜桃	〃	23.2 × 53.2	1965
52	〃	赤い鉢と桜桃	〃	47 × 62	1966
53	吉田　政次	静 №36	ウッドカット	37 × 26.5	1953
54	〃	静 №70	〃	32.5 × 40	1955
55	〃	森の精 №1	〃	56 × 82.5	1955
56	〃	憂愁の空 №1	〃	446 × 62.7	1957
57	〃	空　間 №48	〃	57 × 57	1957
58	〃	空　間 №8	〃	74.5 × 41	1960
59	〃	空　間 №44	〃	57 × 57	1965
60	〃	空　間 №50	〃	45 × 43	1957
61	〃	ミニとデモの時代 №1	〃	87 × 72	1968
62	〃	青春の輝き	〃	87 × 72	1969
63	保田　春彦	作　品	シルクスクリーン	38 × 38.1	1971
64	〃	〃	〃	56.4 × 38.4	1971
65					
66	保田　竜門	アンドレの首	ブロンズ	19	1922
67	〃	うづくまる女	〃	35	1947
68	〃	鳩をもつ女	〃	81	1949
69	建昌　大夢	お湯のつかれ	〃	66.7	1913
70	〃	憩う女	〃	113.6	1925
	〃	恩師の顔	〃		1939

3　共催展覧会

□「第12回和歌山県美術家協会展」

和歌山県美術家協会々員による総合美術展

会　期　第1期＝6月13日～17日（洋画、彫塑、写真、現代造形）　第2期＝6月20日～24日（日本画、工芸、書、生花）

主　催　和歌山県美術家協会　和歌山県立近代美術館　／**後　援**　朝日新聞和歌山支局、和歌山県立近代美術館友の会

□「昭和49年度　和歌山市美育協会春の写生展」

和歌山市内の幼稚園、小学校、中学校、高等学校の児童生徒の写真画展

会　期　6月27日～7月1日（大展示室）／**主　催**　和歌山市美育協会　和歌山県立近代美術館

□「第9回和歌山県立近代美術館友の会展」

県立近代美術館の友の会活動の一環として行なうアマチュア総合美術展（日本画、洋画、工芸、書、写真、生花）

会　期　8月7日～12日（一般、中、小展示室）

主　催　和歌山県立近代美術館友の会　和歌山県立近代美術館　／**後　援**　和歌山県美術家協会

□「第7回和歌山県勤労者美術展」

勤労の余暇に制作した美術作品を展示し、本県勤労者の美術文化の向上を図るための公募展

会　期　9月4日～8日（日本画、洋画、彫塑、工芸、書、写真、生花）

主　催　和歌山県　和歌山県立近代美術館　／**後　援**　和歌山県美術家協会　和歌山県労働者福祉協議会　和歌山県経営者協会

□「第28回和歌山県美術展覧会」（県展）

県民の美術に関する愛好心と鑑賞力を啓発し、美術作品の創作意欲の昂揚をはかり、本県における美術文化の向上発展に資するために開催する。（昭和49年度県民文化祭参加）

会　期　第1期＝11月16日～21日（日本画、書、生花）
第2期＝11月23日～28日（工芸、写真、現代造形）
第3期＝11月30日～12月5日（洋画、彫塑）
新宮展（各部門選抜）、〔除生花〕／於・新宮市民会館

主　催　和歌山県教育委員会　和歌山県立近代美術館　毎日新聞和歌山支局　新宮市教育委員会（新宮展）

主　管　和歌山県美術家協会　／**後　援**　和歌山県　新宮市（新宮展）

□昭和49年度「県高校総合芸術祭書道美術展」

県下の各高等学校が参加して開催する総合芸術祭行事の美術展部門（昭和49年度県民文化祭参加）

会　期　12月18日～23日　／**主　催**　和歌山県高等学校芸術科教育連盟　和歌山県立近代美術館

□「第8回和歌山県立近代美術館友の会習作展」

和歌山県立近代美術館友の会各実技講座参加者による昭和49年度活動の総括展（日本画、洋画、写真、陶芸）

会　期　2月19日～24日（一般、中、小展示室）

主　催　和歌山県立近代美術館友の会　和歌山県立近代美術館　／**後　援**　和歌山県立美術家協会

□「第35回国際写真サロン入選作品展」

写真を通じて国際文化の交流と親善をはかる場として知られている「国際写真サロン」の入選作品展

会　期　3月26日～31日（大、中展示室）／**主　催**　朝日新聞社　全日本写真連盟　和歌山県立近代美術館

4 貸館展覧会

会期	名称	概要	展示室
4月3日～ 8日	第4回睦林会南画展	日本画／寺口関山門下	大展示室
4日～ 7日	第21回洗心書道会一般部展	書／西林凡石門下	一／中／小
10日～ 14日	第8回和菖会書道展	書／県立和歌山商業高校OBグループ	一般展示室
17日～ 22日	有人クラブ写真展	写真／駒木根紅花主宰	一般展示室
24日～ 29日	和歌山市医師会美術展	絵画、工芸等／和歌山市医師会グループ	一般展示室
5月1日～ 6日	第3回集団光写真展	写真／和歌山市在住写真グループ	一般展示室
22日～ 26日	第23回和歌山市美術展・第1期	日本画、工芸、書、生花／和歌山市教委	全館
29日～6月2日	同上 第2期	洋画、彫塑、写真	全館
6月5日～ 10日	示現会和歌山巡回展	洋画／中央展作品（選抜）と支部会員作品	全館
27日～7月1日	和大絵画部2回生グループ展	洋画／和歌山大学絵画部2回生グループ展	中展示室
27日～7月1日	第10回葵フォトグループ写真展	写真／亀忠男主宰	一般展示室
7月3日～ 8日	エトアール洋画展	洋画／エトアール洋画会	中展／小展
3日～ 8日	第4回洋画12人展	洋画／同好グループ	一般展示室
10日～ 15日	漆と花展	工芸、生花／橋爪靖雄主宰	小展示室
10日～ 15日	日曜画家展	洋画／日曜画家グループ	中展示室
10日～ 15日	創作手芸の会展	工芸／手芸同好グループ	一般展示室
18日～ 22日	第39回木国写友会展	写真／島村安彦主宰	中展示室
18日～ 22日	オール関西フォトグループ展	写真／関西在住全日本写真連盟加盟者	一般／小展
24日～ 29日	形成展	洋画／同好グループ	中展示室
24日～ 29日	近畿工業高校建築デザイン展	建築デザイン／近畿工業高校建築連盟	一般展示室
24日～ 29日	グループ「しつ」展	工芸／漆器同好グループ	小展示室
31日～8月4日	和歌山県書道協会展	書／和歌山県書道協会	一／中／小
8月15日～ 19日	星墨会展	書／県立星林高校OBグループ	中展示室
15日～ 19日	第4回壱魯会習作展	書／大岡皓崖門下	一般展示室
15日～ 19日	ワカヤマFCC作品発表展	写真／写真同好グループ	小展示室
21日～ 26日	青樹会日本画展	日本画／青樹会	中展示室
22日～ 26日	アトリエオノOBグループ展	洋画／アトリエオノOBグループ	小展示室
21日～ 26日	グループ旺美洋画展	洋画／和歌山市成人学級絵画教室OB	一般展示室
29日～9月1日	紀陽銀行、花王石鹸合同美術展	洋画／紀陽銀行、花王石鹸美術クラブ	一般展示室
29日～9月2日	第1回律の会洋画展	洋画／斉田武夫主宰洋画グループ	小展示室
29日～9月2日	海南高校OB展	洋画／海南高校OB美術グループ	中展示室
9月10日～ 11日	県民文化祭参加 生花展	生花／いけばな協会、華道連盟合同展	全館
18日～ 23日	第6回絵画サークル「樹」展	洋画／絵画サークル「樹」	中展示室
20日～ 22日	書人会展	書／和歌山書人会	大展示室
18日～ 23日	県美術サークル展	洋画、日本画／県美術サークル連絡協議会	一般展示室
25日～ 30日	第8回三光会日本画展	日本画／山東光風門下	一般展示室
26日～ 30日	新世紀和歌山グループ展	洋画／新世紀美術協会和歌山グループ	中展示室
26日～ 30日	小、中学生書道コンクール展	書／県共済農協連合会	大展示室
28日～ 29日	健筆書道会習作展	書／健筆書道会	小展示室
10月2日～ 7日	県民文化祭参加 俳画展	日本画／県俳画協会	一展／小展
2日～ 7日	同 県文化協会美術展	絵画、写真、書／県文化協会	大展／中展
9日～ 13日	第15回和歌山旺玄美術展	洋画／旺玄会和歌山クラブ	一般展示室
30日～11月4日	県民文化祭参加 紙人形展	紙人形／紙人形展実行委員会	一般展示室
12月7日～ 12日	和歌山大学絵画部展	洋画／和歌山大学絵画部	大展示室
7日～ 8日	第17回花王展	絵画／書／写真／手芸等／花王石鹸文化祭	一／中／小
12日～ 16日	あくと展	洋画／中学校美術科教員グループ	中展示室

12日～ 16日	新県民運動書道展	書／県下小、中、高校生作品	一般展示室
12日～ 16日	示現会小品展	洋画／示現会和歌山支部	小展示室
14日～ 16日	県民文化祭参加 写真展	写真／全日本写真連盟県本部	大展示室
1月17日～ 20日	市和商デザイン科卒業制作展	商業デザイン／和歌山市立商業高等学校	一展／小展
22日～ 27日	新構造社和歌山支部展	洋画／新構造社和歌山支部	一展／小展
22日～ 27日	グループ「かに」作品展	洋画／グループ「かに」	中展示室
29日～2月3日	日中友好青年の船写真展	写真／県広報課	一般展示室
29日～2月3日	和歌山大学書道部展	書／和歌山大学書道部	中展／小展
2月12日～ 17日	きりがみ展	きりがみ画／中国きりがみ同好グループ	一般展示室
12日～ 17日	大東文化大学和歌山県人書道展	書／大東文化大学和歌山県人書道会	中展示室
26日～3月3日	新古会・童山会展	日本画／古村徹三主宰	一般展示室
3月7日～ 10日	第5回高校書道科教員書作展	書／県高校書道教育研究会	一般展示室
12日～ 17日	和大芸術科専攻生卒業制作展	絵画、デザイン、彫刻／和歌山大学	一般展示室
19日～ 24日	アトリエオノ展	洋画／アトリエオノグループ	一般展示室
26日～ 30日	和大絵画部卒業記念展	洋画／和歌山大学絵画部	小展示室

5 普及活動

「美術館だより」

「美術館だより」は館の広報紙である。館主催、共催展覧会の紹介および解説、友の会の行事案内や活動報告、和歌山の美術文化関係のニュース、貸館展覧会、随筆等掲載している。現在発行部数約2000部。

号数	発行日	主要記事
100号	4月1日	吉田政次遺作展〈解説〉(酒井哲朗)　版画芸術の流れ(太田将勝)　100号によせる所感(和高伸二、斉田武夫、玉井一郎、岩橋清、川添定信、客殿賢、千賀永次郎、南由次郎、矢倉道子、山崎芳隆)
101号	5月1日	春の油絵写生大会　第23回和市展　ある画友の死(八幡三郎)
102号	6月1日	吉田政次遺作展によせる感想作文審査結果発表　ヨーロッパ旅行マリョルカ島(八幡三郎)　再会(宮村泰彦)
103号	7月1日	和歌山から巣立った主要作家の世界(太田将勝)　吉田政次遺作展によせた小、中、高校生の感想作文
104号	8月1日	第9回美術館友の会展　第7回県勤労者美術展　硲伊之助の絵画と陶芸(太田将勝)　吉田政次遺作展によせた小、中、高校生の感想作文。
105号	9月1日	硲伊之助展によせて「不肖の弟子のことば」(中畑草人)　南紀寺院の長沢芦雪画
106号	10月1日	九谷絵つけに就いて(硲三彩亭)　第28回県展開催要項　友の会写生旅行「枯木灘江須崎を描く」
107号	11月1日	昭和49年度県文化賞、文化功労賞、文化奨励賞(木下繁、寺口関山、田伏生石、木国写友会)　南紀高松焼について(中村貞史)(Ⅰ)
108号	12月1日	第28回県展の記録　南紀高松焼について(中村貞史)(Ⅱ)
109号	1月1日	新春のごあいさつ(館長、県美術家協会長、美術館友の会長)　仏像あれこれ(和高伸二)　地方美術館のひとつの道(酒井哲朗)　亙の話(中谷英雄)
110号	2月1日	聖なるモノグラムについて(太田将勝)　特別展「瑞芝焼」(梅原孝雄)
111号	3月1日	館蔵品による「和歌山の作家」展　「芸術家と故郷」について　巴里通信(佐原光)

「友の会活動」

和歌山県立近代美術館友の会は、一般の美術愛好層で組織され、年間を通じて、県民の美的素養の向上に寄与する諸活動を行なっている。昭和40年10月発足。49年3月末現在の会員数は967人(一般会員889、賛助会員78)。

(注　行事名、期日、〈テーマ〉、講師、参加人員の順に記載。省略されている項は前回例会に同じ。)

〔美術鑑賞講座〕

4月27日　〈吉田政次の版画の世界〉酒井哲朗　25人
5月24日　〈知られざる近郊の社寺めぐり〉和高伸二　50人
6月23日　〈セザンヌ展を観る〉和高伸二、70人
7月28日　〈信楽陶芸まつり見学〉山本学109人
9月26日～29日　〈加賀、能登の風土と民俗をたずねて〉74人
10月20日　〈硲伊之助の芸術世界〉太田将勝、12人
11月17日　〈南紀寺院の長沢芦雪画列品解説〉和高伸二　22人
1月12日　〈美術鑑賞のあり方について〉、和高伸二　19人
2月23日　〈瑞芝焼列品解説〉中村貞史、23人
3月22日　〈長保寺の仏像と建築を観る〉和高伸二　36人

〔洋画実技講座〕

5月19日　〈新緑の和歌山公園を描く〉倉田純三、浜田邦男、若林昌峰　51人
6月23日　〈初夏の大池遊園風景〉、多田俊彦　47人
7月14日　〈夏景色の粉河寺を描く〉榎本白華　27人
8月4日　〈コスチュームの女性像〉小川英夫　37人
9月8日　〈花のある静物画〉山東好雄　27人
10月26日～27日　〈枯木灘江須崎の秋の景色を描く〉益山英吾　42人
11月17日　〈人形のある静物〉山東好雄　18人
12月15日　〈静物画のいろいろ〉中島久次　23人
1月12日　〈静物画のいろいろ〉斉田武夫　37人
2月16日　〈コスチュームの女性像〉小川英夫　34人
3月9日　〈楽器のある静物〉前田博　18人

〔日本画実技講座〕

4月14日　〈写生画の基本と制作〉古村徹三　30人
5月12日　〈山水画の基本〉寺口関山　40人
6月9日　〈山水画の基本〉寺口関山　38人
7月14日　〈山水画の基本〉寺口関山　40人
8月11日　〈山水画の基本〉寺口関山　43人
9月8日　〈山水画の基本〉寺口関山　40人
10月13日　〈山水画の基本〉寺口関山　38人
11月24日　〈花鳥画の基本〉青木虹興　56人
12月15日　〈花鳥画の基本〉青木虹興　47人
1月12日　〈花鳥画の基本〉青木虹興　46人
2月11日　〈花鳥画の基本〉青木虹興　43人
3月23日　〈和歌山公園の風景を描く〉青木虹興　20人

〔写真実技講座〕

4月21日　〈4月の月例コンテストと作品指導〉駒木根紅花　6人
5月19日　〈5月の月例コンテストと作品指導〉五十嵐靖郎　10人
6月16日　〈6月の月例コンテストと作品指導〉木村太郎　12人
7月21日　〈7月の月例コンテストと作品指導〉西川高三　9人
8月18日　〈8月の月例コンテストと作品指導〉西川高三　8人
8月11日　〈ヌードの撮り方〉西川高三　35人
9月15日　〈日の岬、アメリカ村、煙樹浜の風物〉葵フォトグループと合同　36人
9月22日　〈9月の月例コンテストと作品指導〉西川高三　11人
10月20日　〈10月の月例コンテストと作品指導〉亀忠男　7人
11月24日　〈11月の月例コンテストと選評、県展鑑賞〉亀忠男　8人
12月8日　〈12月の月例コンテストと選評〉藤戸輝一　6人
1月12日　〈新春月例コンテストと作品選評〉西川高三　8人
2月16日　〈2月の月例コンテストと選評〉五十嵐靖郎　7人
3月23日　〈49年度最終月例コンテストと作品指導、「年度賞」受賞者表彰式〉西川高三　9人

〔陶芸実技講座〕

4月14日　〈陶芸の初歩〉山本学　43人
4月21日　〈ロクロによる陶芸制作のテクニック〉柏井良夫　10人
5月4日　〈焼成〉山本学　37人
5月19日　〈初歩の陶芸制作〉山本学　45人
5月26日　〈ロクロによる陶芸制作のテクニック〉柏井良夫　12人
6月1日　〈焼成〉山本学　39人
6月9日　〈初歩の陶芸制作〉山本学　51人
6月16日　〈ロクロによる陶芸制作のテクニック〉柏井良夫　9人
6月29日　〈焼成〉長野敬　40人
7月28日　〈信楽陶芸まつり見学〉山本学　109人
9月8日　〈初歩の陶芸制作〉山本学　48人
9月15日　〈ロクロによる陶芸制作のテクニック〉柏井良夫　11人
9月21日　〈焼成〉山本学　45人
10月13日　〈ロクロによる陶芸制作のテクニック〉柏井良夫　10人
10月20日　〈初歩の陶芸制作〉吉増達夫　48人
10月26日　〈焼成〉吉増達夫　43人
1月12日　〈初級、上級合同制作〉吉増達夫、柏井良夫　42人
1月25日　〈焼成〉吉増達夫　31人
2月9日　〈ロクロによる陶芸制作のテクニック〉柏井良夫　15人
2月16日　〈楽焼による初歩の陶芸制作〉柏井良夫　15人
2月16日　〈楽焼による初歩の陶芸制作〉吉増達夫　45人
3月1日　〈焼成〉吉増達夫　30人
3月9日　〈楽焼による初歩の陶芸制作〉吉増達夫　31人
3月16日　〈ロクロによる陶芸制作のテクニック〉柏井良夫　7人
3月22日　〈焼成〉吉増達夫　30人

6　昭和49年度所蔵作品・寄託作品

「購入作品」

1	アンドレ・ロート	ミルマンドの城壁	油彩キャンバス	34 × 24.5		
2	長谷川利行	裸　婦	グワッシュ・紙	18.5 × 18.5		
3	〃	工場街	〃	14 × 21.5		
4	小野竹喬	春　芽	紙本着彩	45.5 × 33.3	1972	
5	裡田一穂	流　翳	〃	162.1 × 112.1	1962	第26回新制作展
6	〃	月　下	〃	178 × 229	1974	第1回創画会展
7	前田政雄	カンナ	木版・紙	42 × 30		
8	〃	蔵王火口湖	〃	45 × 59.5	1953	
9	下沢木鉢郎	朝富士（焼津）	〃	30 × 39.5		
10	〃	碇ケ関	〃	23.5 × 33		
11	畦地梅太郎	谷間の声	〃	49.5 × 37	1966	
12	〃	鳥をいだく	〃	40 × 29.5	1956	
13	〃	青　凍	〃	69 × 46	1960	
14	笹島喜平	森　№18	〃	45 × 60	1961	
15	〃	西大寺西天堂	〃	45 × 45	1972	
19	橋本興家	菖蒲と少女	〃	39 × 54.5	1952	
17	〃	小径（桂）	〃	73 × 52	1965	
18	斉藤　清	Wall of Kyoto（京の壁）	〃	48.5 × 78.5	1960	
19	〃	Toshodai-ji（唐招提寺）	〃	75.5 × 45.5	1959	
20	平塚運一	興福寺南円堂	〃	45.5 × 37	1941	
21	〃	高野山奥の院	〃	37.5 × 45.5	1960	
22	稲垣知雄	Record of my crop（収穫の記録）	〃	46 × 60.5		
23	〃	Lump（ランプ）	〃	53 × 41		
24	山口　進	生　家	〃	43 × 58.5	1966	
25	〃	秋立つ頃	〃	39 × 54.5	1959	
26	星　襄一	大　樹	〃	64 × 64	1974	
27	〃	漂（A）	〃	45 × 61	1962	
28	〃	星座17番	〃	43 × 58	1965	
29	水船六洲	冬の門　winter gate	〃	41.3 × 53		
30	品川　工	転　身	〃	56 × 43		
31	〃	息吹き	〃	61.5 × 45	1959	
32	萩原英雄	悪の華	〃	57.7 × 40.5		
33	〃	白蛾　white moth	〃	66 × 39.5	1959	
34	〃	黒土　Black Earth	〃	42 × 56.5	1960	
35	上野　誠	焼けた五重塔	〃	58.5 × 43.3	1957	
36	山口　源	ROUNDABOUT（注）	〃	87.5 × 59	1959	
37	〃	GERMINATION（萌芽）	〃	83.8 × 45.5	1959	
38	村井正誠	僧	シルクスクリーン	75 × 56	1973	
39	〃	棒持つ人	石　版	71 × 53	1964	
40	〃	太陽と鳥	シルクスクリーン	75 × 56	1975	
41	馬淵　聖	土器つぼとはち	木版・紙	54.5 × 39.3	1957	
42	〃	土器と埴輪	〃	56 × 40.5	1959	
43	〃	みかん	〃	56 × 40.6	1962	
44	関野準一郎	志賀直哉像	〃	67 × 53		

45	関野準一郎	水族館	木版・紙	57 × 45	
46	小野　忠重	陽ざかり	〃	30 × 45	1965
47	〃	かける	〃	30 × 45	1965
48	〃	にわとり	〃	30.5 × 45.5	1972
49	〃	あれる	〃	45 × 61	1960
50	〃	船つくり	〃	60.5 × 44.5	1965
51	〃	灯台の道	〃	59.5 × 45.5	1951
52	〃	長崎の丘	〃	44.5 × 60.5	1964
53	〃	レニングラードの浮氷	〃	44.5 × 59	1962

「寄贈作品」

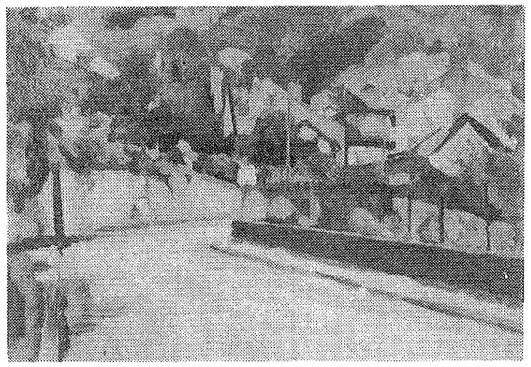
1	硲伊之助	ブザンソンの風景	木版・紙	49 × 59.5	1924
2	〃	吸坂手呉須上絵大皿　新緑のなかのひと	〃	径43	1972
3	裡田一穂	小　蓮	〃	141 × 242	1970
4	吉田政次	静　№36	〃	37.3 × 26	1953
5	〃	静　№70	〃	32.5 × 39.8	1955
6	〃	森の精　№1	〃	57.1 × 84.5	〃
7	〃	地の泉　№1	〃	56.8 × 82.6	1956
8	〃	悲しき記録　№1	〃	60.3 × 42.5	〃
9	〃	哀愁の日	〃	59.3 × 43.5	〃
10	〃	憂愁の空　№2	〃	43.5 × 71.5	
11	〃	空　間　№8	〃	74.2 × 40.5	1960
12	〃	空　間　№17	〃	55.5 × 56.3	1962
13	〃	空　間　№44	〃	56 × 56	1965
14	〃	空　間　№48	〃	59.5 × 58.5	1965
15	〃	空　間　№50	〃	45.5 × 43.5	1965
16	〃	除夜の鐘　№1	〃	60 × 45.5	1967
17	〃	ミニとデモの時代　№1	〃	88 × 69	1968
18	〃	躍動する心　№1	〃	87 × 68.5	〃
19	〃	躍動する心　№6	〃	80 × 70	〃
20	〃	熱　砂　№1	〃	63 × 47	〃
21	〃	青春の輝き　№2	〃	87 × 68	1969
22	〃	作品（デッサン）	インク・紙	63 × 50	1969

「寄託作品」

1	木下義謙	横たはれる裸婦	油彩キャンバス	73 × 117	1926
2	〃	婦人像	〃	116.5 × 73.3	1928
3	〃	九谷の渓流	〃	91.5 × 122	1945
4	硲伊之助	村の入口	〃	65.5 × 92	1924
5	〃	ひまわり	〃	100 × 80.5	1943
6	原勝四郎	椅子に座る裸婦	油彩板	41 × 31.5	1930
7	〃	仰臥裸婦	油彩ボール紙	45.1 × 37.8	〃
8	〃	母子像	〃	64.8 × 53	〃
9	〃	裸　婦	〃	72.3 × 60.7	〃
10	〃	婦人像	〃	72.4 × 60.0	1934
11	〃	瀬戸風景	〃	65.0 × 53.0	1935
12	〃	裸　婦	油彩キャンバス	51.3 × 63.0	1959
13	〃	化　粧	油彩ボール紙	72.2 × 60.0	

14	原勝四郎	母子像	油彩板	60.6 × 49.8	
15	〃	静　物	〃	38.5 × 45.5	
16	〃	静　物（バラ）	〃	53.0 × 45.0	1960
17	〃	陽子像	〃	27.0 × 21.0	
18	〃	顔	〃	45.0 × 37.7	1954
19	〃	裸　婦	〃	45.4 × 60.4	
20	〃	婦人像	〃	45.2 × 37.7	
21	〃	厚子像	油彩ボール紙	52.5 × 64.5	1929
22	〃	裸　婦	〃	60.4 × 46.4	1930
23	〃	裸　婦	〃	60.3 × 46.3	〃
24	〃	裸　婦	〃	60.4 × 46.0	〃
25	〃	陽子像	油彩板	64.3 × 53.2	
26	〃	老人像	〃	48.6 × 41	
27	〃	自画像	デッサン　インク		
28	〃	女の顔	デッサン　鉛筆		1921
29	〃	裸　婦	〃		〃
30	〃	裸　婦	〃		〃
31	〃	陽子像	デッサン　墨		
32	〃	自画像	デッサン　鉛筆		
33	〃	風　景	水　彩		1915
34	ヘンリー杉本	South Ferry New York	油彩キャンバス	162 × 130	1967
35	〃	Longing	〃	162 × 130	1968
36	〃	Young Master	〃	162 × 130	1967
37	〃	寺院のみえるビーエー村	〃	79 × 99	1940
38	〃	クロイスター背景	〃	72 × 60	1964
39	〃	モレー洗濯場	〃	90 × 72	1964
40	〃	パン配達娘	〃	90 × 72	1963
41	〃	Weather Station	〃	96 × 130	1968
42	〃	Coit Tower	〃	130 × 97	1969
43	〃	Faith Love Hope	〃	162 × 130	1966
44	〃	Young Americans	〃	162 × 130	1966
45	〃	Tenament New York	〃	140 × 170	1965
46	〃	Paris in Autumn	〃	140 × 170	1965
47	〃	Strange Home	〃	162 × 130	1969
48	〃	Beneath the sky line	〃	162 × 130	1971
49	〃	Our winter	〃	130 × 162	1970
50	吉田政次	静　寂 №1	木　版	155 × 78	1959
51	〃	相対性絵画 №1	〃	155 × 78	〃
52	〃	〃 №2	〃	125.4 × 125.4	〃
53	〃	〃 №3	〃	125.4 × 125.4	〃
54	〃	〃 №5	〃	85 × 182	〃
55	〃	〃 №6	〃	157 × 78	〃
56	〃	〃 №7	〃	125.4 × 125.4	〃
57	〃	〃 №8	〃	125.4 × 125.4	〃
58	〃	〃 №9	〃	125.4 × 125.4	〃
59	〃	〃 №10	〃	125.4 × 125.4	〃
60	〃	〃 №18	〃	125.4 × 125.4	〃
61	〃	〃 №19	〃	125.4 × 125.4	〃

62	ヘンリー杉本	相対性絵画 №20	木　版	125.4 × 125.4	1959
63	〃	空　間 №5	〃	155 × 79	1960
64	〃	芸術の壁 №1	〃	108 × 210	1964
65	〃	芸術の壁 №2	〃	108 × 210	〃
66	〃	我が宇宙 №1	〃	108 × 213	1965
67	〃	芸術の壁 №1	〃	108 × 210	1964
68	〃	芸術の壁 №2	〃	108 × 210	〃



硲伊之助　「村の入口」（ブザンソン風景）1924

7　所蔵品貸出状況

貸出先	展覧会名・会期	貸出作品	種別	点数
京都市美術館	特別展　昭和の洋画―戦前の動向― 49.11.3 ～ 11.27	石垣栄太郎作 「抵　抗」 「キューバ島の反乱」 「K．K．K」 川口軌外作 「少女と貝殻」 「スブニール」 「無　題」	洋　画	6

8　県立近代美術館協議会委員

氏名	住所
明楽光三郎	海南市日方582
川瀬浩一	御坊市御坊79
大岡皓崖	和歌山市 黒田168の9
桐山義雄	和歌山市 北新元金屋町7
楠見勝寛	和歌山市 新在家56
斉田武夫	和歌山市湊671
島村安彦	和歌山市磯山町4の2
杉本義夫	新宮市船町2－6－6
玉井一郎	和歌山市寺町13
岩田公人	那賀郡打田町古和田
寺田健治	和歌山市新堀北ノ丁3－40
尾藤昌平	和歌山市新堀七軒町5
室谷文男	和歌山市園部有功ケ丘団地152の8
富松助六	和歌山市 北坂ノ上丁1
脇村正太郎	田辺市栄町52

会　長　　明楽光三郎

副会長　　室谷文男

9　県立近代美術館職員構成

館　長　　渡辺光男

次　長　　高　　巌

（庶務課）

課　長　　吉田禎之

主　事　　辻本介彦

技　師　　松下勝行

（事業課）

課　長　　野口照彦

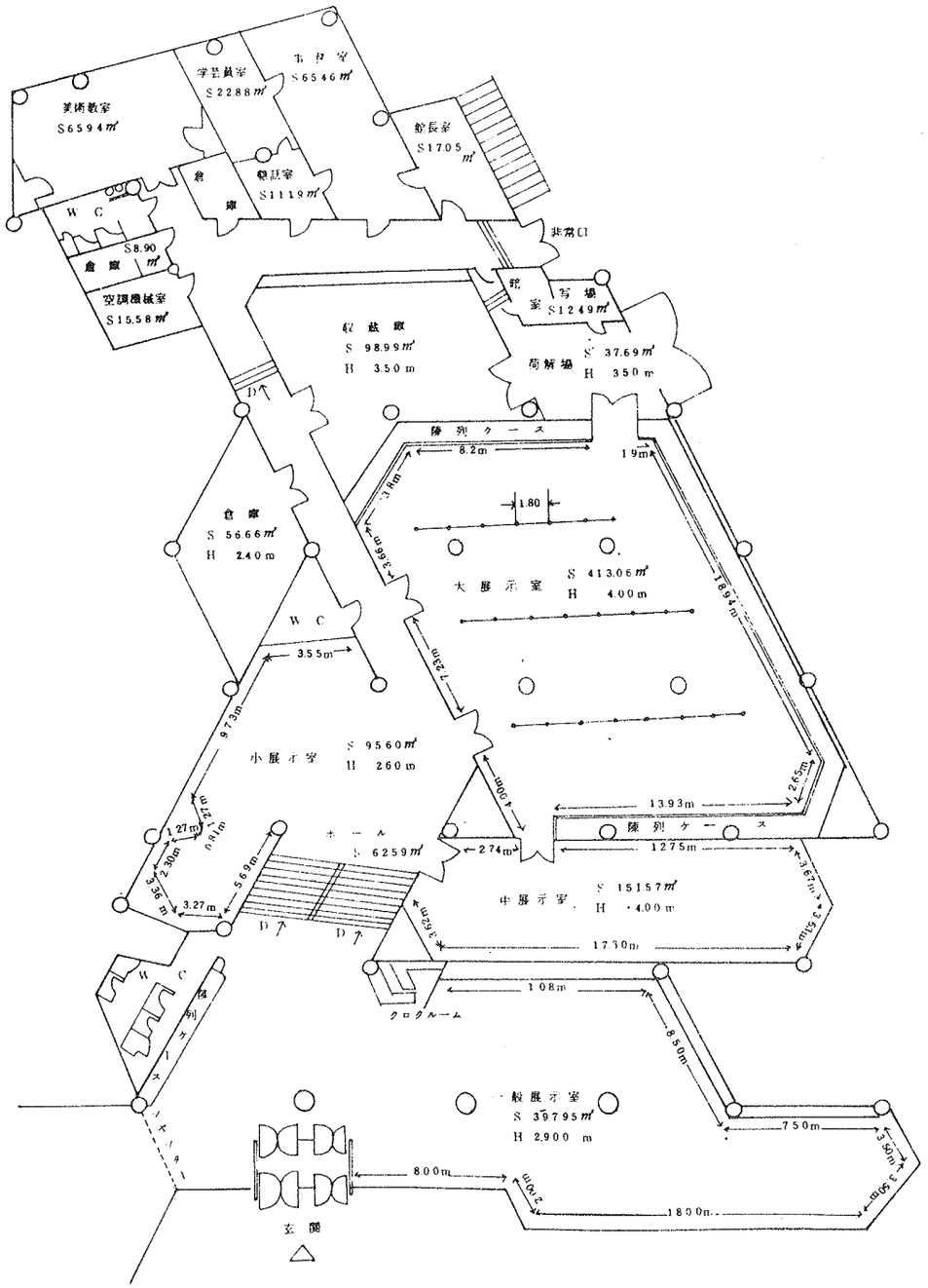
主　査　　南川諄一

学芸員　　酒井哲朗

学芸員　　太田将勝

嘱　託　　和高伸二（非常勤）

10　近代美術館配置図



和歌山県立近代美術館年報
昭和49年度

昭和51年3月31日　印刷
昭和51年3月31日　発行

編集・発行
和歌山市小松原通1丁目
和歌山県立近代美術館

印刷所　有限会社関西プリント商会